

慈眼寺たより

第15号
平成25年12月
春日井市下市場町
「慈眼寺」
電話 81 6801
編集 伊藤秀文

「いなか」から「まち」へ

篠木八丁目 伊藤春明

私は、生まれてずっと下市場町に住んでいましたが、結婚を機に篠木八丁目に住むようになりました。

下市場町も農村から住むまちへ大きく変わりましたが、私の住むところも大きく変わりました。



「いなか」が「まち」になりましたねと、ある知人が言いました。篠木四ツ谷は平成二十六年三月末を完了目標に、区画整理事業を進めています。高見光男理事長始め関係役員（下市場からは大野進さん、伊藤秀文さん）が最後の仕事に力を入れています。

四ツ谷は、明治の始めまでに宅地化されていたのは「秋葉堂」を中心とした街道沿いで、七丁目にあります。「神明社」は幕末か、明治のはじめの創建で、周囲に住宅はなく、松を中心とした雑木林が多かったのであります。

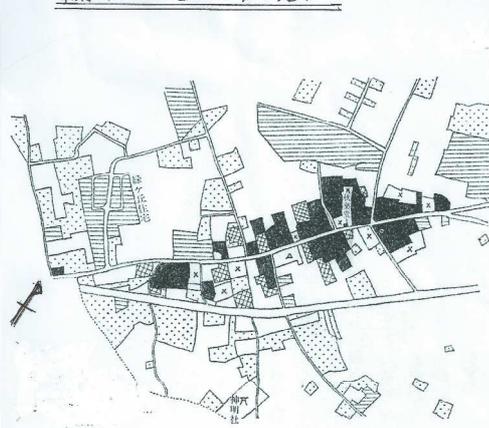
現在の四ツ谷は、大型商業施設の招致、県道鷹来線の開通等で大きく様変わりしました。国道十九号線沿いの森や桑畑、桃畑等は姿を消し、

商業、事業所、住宅地として変貌しました。

町内会加入世帯は、区画整理事業組合設立時（平成九年）約二百二十世帯だったものが、平成二十六年の完成時には三百二十世帯になるうっています。

地権者五百人、面積四十二ヘクタール、減歩率二十七%。当組合設立から十六年です。「いなか」から「まち」へ皆様のご協力によって、なすとげられようとしています。

篠木四ツ谷の移り変わり



明治初期以前 × 非宅地化（昭和12年以前）
昭和12年以前 △ 非宅地化（昭和35年以前）
昭和35年以前
昭和47年以前

青柳歌壇・俳壇

五円玉器に入れて玄関に苦を除くとう試しておりぬ

た

満月の名月を見て観音様
案山子にもお星様の立ち話

伊藤清雄

田の畦や紅が際立つ彼岸花
朝の空野分の土産虹二つ

祠雲

蓮の花群れて高さを競ひけり
寒月や六十過ぎの習ひ事

伊藤貴美子

撫で艶のおもかる石や神の留守
ふるさとの路地に迷へり枇杷の花

矢野孝子

落葉さん風に吹かれて衣替え
足湯にて外を眺めりや吉根山

ひさ

暮れ泥む八十路の坂は険しくも心身
整え米寿目指さん
朝夕は早や暖房の世話となる庭の熟柿を鳥啄むを見る

今井正

秋祭り氏子の役は法被着て
バスの窓手が届きそう富士の雪

秀

東日本大震災と俳句

伊藤清雄

平成二十五年九月、白い表紙の一冊の俳句集が届けられました。

東日本大震災俳句集「私の一句」です。この本は宮城県俳句協会が東日本大震災で犠牲になられた方々の追悼、慰霊として東日本大震災からの復興を願い、同協会会長高野ムツオ氏を中心に協会のみなさんが日本全国の俳句作家の人々に呼びかけ、そのご尽力により、発行されたものです。日本全国から一二六一人が参加し、一九七ページの立派な本ができました。一部抜粋させていただきます。

顔描けば顔泣く地震と雪の音
 仙台 京武久美
 泥かぶるたび角組み光る蘆
 宮城 高野ムツオ
 春山のくつきり見える震災後
 仙台 中村孝史
 テラベクレルの埋る我が家の瓦礫を食へ
 茨城 積悦史
 津波あとに老女は生きてあり死なぬ
 埼玉 金子兜太
 原形は春蚕のような鳥でした
 埼玉 堀之内長一

白魚に箸を被災の島なれど

埼玉 正木ゆう子

春の地震などと気取るな原発忌

埼玉 山崎十生

被曝の牛岬の鼻に出してしまう

千葉 武田伸一

大津波人も家も春も流れる

千葉 鳴戸奈菜

パンジーの光あつめて祈るなり

東京 安西篤

遺族あり風化するのこの明るさ

東京 川名つぎお

サンダルを探すたましひ名取川

東京 高柳克弘

八方の原子爐たふと四方拝

逗子 高橋睦郎

北上を急げよさくら前線も

横浜 鷹羽狩行

夕ざくら湯気のためもの食うて泣く

川崎 田中亚美

朝焼けの翅の蜻蛉を掌

松本 宮崎静生

みちのくの天地へ春の女神呼べ

名古屋 伊藤敬子

さくらクレパス3・11の雪が降る

春日井 伊藤清雄

気仙沼去らぬ父祖らに朝の海

四日市 稲葉千尋

相馬野馬追勇士筆を苦く噛む

伊勢 大西健司

短夜の赤子よもつともつと泣け

大阪 宇多喜代子

荒波や地軸乱れし春の午後

奈良 和田悟朗

言つまでもなく北海道から

沖繩の方々に参加して下さいました。これは東日本大震災と俳句文化の係わり合いの一つです。俳句は日本文化と独特の係わり合いがあり、その一つが季語です。例えば終戦日は一般的にはあまり話題にならないですが、俳句では秋の季語としてよく使われています。

今度の大地震でも「3・11」という新しい季語ができ、「震災忌」という語も関東大震災を表す季語だったのが、東日本震災を表す春の季語になりました。また、フクシマ原発の事故を「フクシマ忌」という季語にしました。このようにして俳句の中では東日本大震災も長く残っていくことでしょう。

来年も良い年になりますように

檀方総代

伊藤辰男

々

伊藤久幸

々

伊藤秀文

々

伊藤正廣

々

大野和義

々

大野悟

々

木村廣孝

住職

春日井浩道

平成二十六年年度年忌表

来年の年忌は次のとおりです。お早めにお申し込みください。

年忌	逝去年
一周忌	平成二十五年
三回忌	平成二十四年
七回忌	平成二〇年
十三回忌	平成十四年
十七回忌	平成十年
二十三回忌	平成四年
二十七回忌	昭和六十三年
三十三回忌	昭和五十七年
三十七回忌	昭和五十三年
四十三回忌	昭和四十七年
四十七回忌	昭和四十三年
五十回忌	昭和四十年

各戸別の年忌はホームページでも見られます(過去帳閲覧)。

行事予定

一月十一日 大般若会
 正午から詠讚歌奉詠
 一時から法要、続いて今年はいオリンの演奏会があります。
 二月十五日 涅槃会
 十時から法要と詠讚歌奉詠
 四月八日 灌仏会
 十時から法要と詠讚歌奉詠。
 甘茶を頂いてください。
 八月十八日 お施餓鬼
 棚経は八月十日くらいからです。詳しくは次号でご案内します。

誰の責任で決めるか

住職 春日井浩道

十一月にフィリピンのレイテ島という島を台風三十号が襲つて、伊勢湾台風を上回りそうなる人的被害が出ました。まるで津波のような高潮が襲来したそうです。

このレイテというところは、太平洋戦争の末期、米軍のフィリピン上陸を阻止するため、日米間で海軍の総力戦が行われたところであり、日本の連合艦隊は、事実上壊滅してしまいました。この頃になると、軍の幹部は日本の敗戦を予測していたようですが、どうせ負けるなら、最後の攻撃を与えて、講和の条件を良くしようといった腹があつたようです。こういう態度は最後まで続き、国民に竹槍を持たせて、最後の決戦をしようとか、何しろ少しでも有利な条件で講話を進めるようにと、色々悪あがきが画策されてきました。

まねいて見ていることは無理だったかも知れません。問題は、それが一部の職業軍人の独断専行というかたちで進められたことです。軍隊に関することは、天皇の統帥権であるから、軍部以外のものは口を出すな。というような論理で、選挙によつて選ばれた政治家は口を挟めないまま、ズルズルと引つ張り込まれてしまいます。明治維新の立役者だつた山県有朋が、俺も参議にしてくれと言つたところ大久保利通がお前は軍人だからダメだ、と答えたそうですが、その頃と比べると統帥権とはナント勝手な言い分なんでしょう。そして天皇の統帥権を代行して行使していたはずの軍部は、その天皇の意向に反しても、自分たちの政策を実行していったのです。もつとも立憲君主であつた昭和天皇は、ほとんどの場合、奏上を聞き置くだけで、良きにはからえ、くらいしか言われなかつたそうですから、軍部は余計やりやすかつたのでしよう。

そして、無能極まりない戦略によつて戦況はドンドンと不利になつて、落とされなくても済んだはずの原爆まで2個も落とされ、結局は政治には口を出さないはずであつた天皇のお出ましにより終戦となつていくのです。

これだけの話なら、勝手な軍部に散々に荒らされ、犠牲にされたかわいそうな国民と天皇というところになりそうなんです。本当のところはどうなんでしょう。いかに馬鹿な軍人といえども、始めから国民に危害を加えてやるうなどとは、考えつかない筈です。彼らにしてみれば良かれと考へて立案されたのでしよう。それでは何が間違つていたか。

統帥権とは本来、軍隊を指揮する権限のことであり、そういう作戦については政治家がいちいち口を出すなということであつたはず。逆に言えば政治には軍人は口を出さなとなるわけです。だから大久保が言つた言葉になるのです。そういう統帥権という言葉が、政争の道具にされ、拳句、軍部のすることには口を出すなとなつてしまつたのです。そういう言葉の誤用には、多くの人が気づいていたはずですが、しかし、自分たちがその誤用を道具として利用したものですから、言い出せなくなつてしまつたのでしよう。そして遂に戦略的国政の中身まで軍人が握つてしまふことになるのです。国民や

一般政治家は文句を言えないまま進められていきます。そして軍人さんの行動原理は、「手柄」なのです。一つでも手柄を立てて勲章を

もらい元帥にしてもらおう。大戦中いろんな作戦が立案されて進められていきますが、殆どが手柄欲しさの無責任な思いつきだつたように思われます。満州事変も、インパールも、ノモンハンも……その結果命を落とすのは、徴兵された農家の二男三男ばかり……

国の運命を左右するような政策をほんのひとにぎりの業界人（軍人）だけで決めて言い訳はありません。かつては小さな問題であつたことが、知らないうちに国の根幹を左右するような事柄になり、それを昔ながらの数人が権限を持つて対処していく事があるように思われます。

例えば原子力政策についても言えるのではないでしょう。その昔、小さな発電所を作れば済んでいた時代とは、全く違つた規模になつてしまつていゝのです。ひとつ間違つと、一つの県が住めなくなるような事を、ひとにぎりの人間だけで決めてしまつていいのでしょうか。また、リニア新幹線などもそうでしょう。でも、そうなるかといふ誰が決めればいいのかと。専門家でも判定しにくいのでしよう。被害を受けそうな人たちからの同意を得ておくのも、ひとつの方法でしょうか。

お仏膳の受付をしています
平成二十六年のお仏膳の受付
をしています。今までどおり一年
一膳あたり千五百円です。
お供えのお菓子は、お下がりとして
お持ち帰りください。

バイオリンの演奏会

来る二月十一日(火) 建国記念
の日、大般若会の法要に続いてバ
イオリンの演奏会を行います。奏
者は、元鎌倉交響楽団の原田薫さ
んというバイオリニストで、百ヶ
寺音巡礼という願を立てられ、各
地の寺院で演奏活動をされています。
入場は無料ですので、多数の方
のご来場をお待ちしております。



みろく山から

今年は台風が発生が多かったで
す。日本に上陸したのは、二三個
だったのですが、最後にはフィリ

ピンを強烈なのが襲い、甚大な被害
が出ました。合掌。こういったの
も温暖化の影響なのでしょうが。
となると、人類の滅亡も遠くない
のかも知れません。

九月十七日、台風一過の朝、み
ろく山に登りました。台風が塵を
持つて行ってしまったのか、眺望
は抜群。御在所岳のロープウェイ
の鉄塔や、名古屋港にかかる湾岸
道路の橋の上の車まで見えました。
こんなことは初めてです。写真を
載せます。見えますか？



世相雑感

特定秘密保護法なるものが国会
で成立しようとしています。こん
な時に何とかして権力にすり寄り
たい政党とか、いろいろあるよう
ですが、公聴会ではオール反対と
いう声を聞きながら、シャニムニ
成立させようとしているのもどう
なんでしょうか。

それでも、せつかく国民の支持
をもらって政権についた自民党で

す。一度やりたいようにやらせて
みてはどうでしょうか。あの民主
党にだって、やりたいようにやつ
てもらったではありませんか。自
分たちで選挙しておきながら、何
かやるたびにいちいち反対では、
何もできなくなってしまうでしょ
う。それに、保護されなければな
らない秘密だつてあるはずです。

国民は、昔ほど不自由でも、無
知でもありません。もし、秘密保
護法の運用で、本当に国民生活に
支障が出るのなら、政権を交代し
てもらえばいいのではないでしょ
うか。以前の民主党がそうであつ
たように。それが民主主義だと思
います。政策なんて、実施してみ
なければどうなるか分からないも
のではないのでしょうか。失敗した
権力者を交代させることこそ、国
民の権利であり義務であると思
うのです。

六十三歳で赤ん坊の時に産院
で取り違えられたという人が出て
きました。それも、実の弟たちが
探し回って見つけてくれたのだそ
うです。この人は、育てられたの
が、かなり貧困家庭だったようで
とても苦勞をされたようです。そ
れでも育ての親や兄弟とは良い関
係だったようで、せめてもの救い
でした。ちょっと想像ができない
事件でしたが、本人にしてみれば

やはり時間を返してくれとしか言
えないのでしょうか。現実は一みに
くいアヒルの子」のようなハツピ
ーエンドにはならないのでしょうか
ね。カツコウはモズなどの巢に卵
を産み、そのヒナはモズの卵を全
部壊してしまつても、ちゃんとモ
ズに育てられるのだそうです。

アイソン彗星というのが見つ
かつて、今世紀最大級の彗星にな
るだろうと言われていました。十
一月二十四日の早朝、カメラを持
つて出かけましたが、見えません
でした。それで、太陽を回つて再
び見え始める十二月の初め頃を期
待してありましたら、ナント二十
九日の早朝、太陽に近づき過ぎて、
壊れて蒸発してしまつたそうです。
せつかく人生最後の彗星を見られ
ると楽しみにしていたのに、残念
でなりません。非常に残念。

編集後記

今年は秋がほとんどなく、夏か
らいきなり冬になつてしまつたよ
うです。風邪などひかれないう
うにお過ごしください。

「慈眼寺たより」第十五号
平成二十五年十二月十日 発行
ホームページ

←
[http://www.ma.ccnw.
ne.jp/jigenji/](http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/)